

中原中也記念館の収蔵資料とその公開

—国文学研究資料館との協同—

中 原 豊

はじめに

中原中也記念館では、中原中也およびその関係者の直筆（原稿、ノート、日記、書簡）、スクラップブック、写真（オリジナルプリント）、遺品等を一次資料と呼んでいる。

こうした資料は、調査による発見、受贈、受託、購入等の経緯で収蔵され、必要に応じて脱酸化、修復等の処理がなされ、適切な保存用品に格納され温湿度が管理された環境で保存されるとともに、データベース化され展示等で一般に公開される。

本講演では、2023 年 12 月現在で 612 点（献呈署名本 21 点を除く）を収蔵している中原中也の一次資料をめぐる動きについてご紹介したい。

1. 中原中也一次資料とその公開——国文学研究資料館との協同

中原中也の一次資料 612 点の内、直筆資料を中心とする 502 点が 2022 年 10 月に国文学研究資料館「近代文献草稿・原稿類に関する所在目録調査と研究」事業（注 1）との協同でデジタル撮影され、2023 年 3 月に国文学研究資料館

「近代書誌・近代画像データベース」と中原中也記念館「収蔵資料データベース」においてインターネット上で同時公開された。まずはそこに至る経緯を振り返り、その意義について考えてみたい。

1994 年 2 月の中原中也記念館開館当初、中原中也一次資料は中原家が保管しており、記念館では館内に設けられた端末で一次資料の高画質とはいえないデジタル画像が閲覧できるのみであった。

一方で、『新編中原中也全集』（以下、新編全集）編集部によって一次資料の調査が進められ、その成果が 2004 年 11 月に完結した新編全集に結実した。

同年 4 月に中原中也記念館は中原家が保管していた一次資料 302 点を収蔵するとともに、新編全集編集部より編集時に用いられた資料（それ以前の編集資料を含む）を受贈した。

その後は、2015 年に中也の友人・安原喜弘のご遺族から書簡など 138 点を収蔵した他、調査による発見や受贈・購入によって少しずつ一次資料の点数を増やし、現在に至っている。データベースについても、2004 年に館内端末の検索システムによる公開、2021 年に web 公開（中原中也一次資料、生前刊行書籍、詩集『在りし日の歌』のみ）と、段階的に公開を進めてきた。

新編全集完結後に発見された新資料については、編集委員であった佐々木幹郎氏とともに調査にあたり、その結果を機関誌「中原中也研究」に発表している。また同誌の「中原中也記念館館蔵資料及び中原中也書誌目録」は、新編全集別巻（下）の「書誌」の延長上にある。中原中也記念館の中原中也一次資料をめぐる調査・研究は、歴代の全集による書誌研究（注 2）を引き継ぐかたち

で行われている。

その後、修復・保存の一環としてのデジタル化を目指したものの予算を獲得できずにいたが、国文学研究資料館との協同のおかげで一気に公開まで進めることができた。新編全集にまとめられている精密な書誌研究を確認・検証できるとともに、一次資料の保存にも益するという意味で、大きな意義があると考えている。

2. 国文学研究資料館「近代書誌・近代画像データベース」と中原中也記念館「収蔵資料データベース」

それぞれのデータベースについて、簡単に紹介しておきたい。

国文学研究資料館の「近代書誌・近代画像データベース」は、公式サイト「電子資料館」内にあり、調査先、収集先、認定書名、発行元およびキーワードで検索できるようになっている。

調査先で中原中也記念館を選ぶと資料の一覧が所蔵者請求番号順に表示され、各資料のページに移動すると書誌情報（国文研 ID、刊行形態、所蔵者名／所蔵者請求記号、書名、著者名、認定書名、認定著者名、寸法、補記、所蔵者名など）とともに「全文画像」のリンクを通じて画像データが閲覧できる。収集先で中原中也記念館を選ぶと資料の一覧が国文研コード順に表示され、「画像表示」のリンクを通じて画像データが閲覧できる。

中原中也記念館の「収蔵資料データベース」には、公式サイトから入ること

ができる。画像データへのリンクが設けられたデータはキーワード検索で「画像あり」を検索すると成立年代順に一覧が表示される（この検索方法は公式サイト内の「NEWSリリース」でも案内している）。また、この一覧は成立年代以外の項目でもソートできるようになっている。

各資料のページでは、基本的な書誌情報（資料名、著者編者、整理番号、分類 ID、形態 ID、成立年代、数量、備考、資料 ID）の他、資料の種類に応じて書籍・雑誌用の項目（版、巻号、作品名・論文名・収録詩、収録作品・論文著者）、書簡用の項目（新編全集書簡番号、差出人、受信人）が表示されるようになっている。

そして「画像」のリンクを通じて国文研の「近代書誌・近代画像データベース」上の「全文画像」に移動できる。

3. 『新編中原中也全集』・「中原中也研究」との連動

画像データベースで提供される画像がもつ意味や価値をより正確に捉えるには、『新編中原中也全集』解題篇の「作品解題」（「現存稿」「初出～三出」「推敲過程」「題名の推移」「解題」「参考」）や別巻（上）の「ノート分解一覧」「日記分解一覧」「SCRAP BOOK分解一覧」「原稿用紙分類一覧」に示された書誌情報、「中原中也研究」に随時発表される新発見資料についての解題を参照することが不可欠である。

例えば、2022 年に収蔵された新発見資料「朝の歌」の自筆原稿は、詩集『山羊の歌』に至る成立過程のどこに位置するかが問題になるが、調査にあたった

佐々木氏によって「第二次形態 A」とされた（注3）。その根拠のひとつが使用された原稿用紙の比較であり、それは新編全集の「原稿用紙分類一覧」に示された情報を参照することで確かめることができる。

中原中也記念館の収蔵資料データベースに、そうした情報を可能な範囲でデータベース自体に織り込み、利用者が必要な情報に速やかにたどりつけるように便宜をはかっている。

4. ささやかな実践—富士正晴記念館収蔵資料の調査と研究

中原中也記念館は、国文学研究資料館の協同申し出と新編全集の書誌研究を引き継ぐかたちで調査・研究を進められたおかげで、前述のようなデータベース公開が可能になっているが、一般的に文学館は設置や運営の主体、運営方針、予算、人員等、それぞれ大幅に異なる条件の下で運営されており、一律に同じ体制を求めることは困難である。一次資料のデジタル化とその公開についても、著作権、所有権、個人情報の問題等が複雑に絡みあっており、同じ文学館の中でも扱いが異なる場合もあり得る。

私自身、茨木市にある富士正晴記念館の収蔵資料を調査させていただいたことがあった（注4）。1939年10月5日付の富士正春宛伊東静雄書簡に富士が書いた中原中也論の原稿について言及されている箇所があるが、ほぼ同時代といえるこの中也論がどのようなものであったのかは不明であった。2019年に調査を始めて最終的には富士正晴記念館が所蔵する未発表の自筆原稿の中にそれを見出したのだが、その所在はすでに「富士正晴記念館所蔵富士正晴資料目

録3 原稿、創作ノート・日記、切り抜き、書画編」(1994年3月 富士正晴記念館)と「富士正晴資料整理報告書14 富士正晴未発表散文—散文タイトル集(付 内容紹介)—」(2006年1月 茨城市立中央図書館併設富士正晴記念館)に記されていた。この二つの文献にたどりついた時、それまでこれらを見逃していたことに気づかされ忸怩たる思いであった(現在、これらの情報は茨城市立図書館ウェブサイト内の「富士正晴目録(Excel版)」で公開されている)。

目指す資料の所在確認においても所蔵する施設の実情に合わせたアプローチが必要になってくるということの一例として受けとめていただければ幸いである。

おわりに

新編全集編集委員の佐々木幹郎氏は、全集を〈年月を経るごとに年輪を重ねて膨らんでいく「物語」〉に喩え、そこに集められた〈資料をめぐるさまざまな情報は、大きな物語の年輪をかたちづくる〉といわれているが(注5)、広く資料の調査、収集、修復保存、公開といった文学館の活動やそれらを用いた研究者の研究活動も、その「物語」の一部であるといえるだろう。一次資料のデジタル化とその公開は、こうした〈大きな物語の年輪をかたちづくる〉ことに寄与するものであることは間違いない。

そして、それは文学館や研究者がそれぞれに行う活動ばかりでなく、両者が協同することでさらに大きな成果を挙げることができるのではないだろうか。文学館の活動は、展示制作やイベント運営に加え、著作権の保護や二次創作の

補助など多様な側面を持っており、その対象は作家や研究者といったいわゆる専門家から一般市民まで幅広い。こうした文学の営みの裾野の広がりに向かって専門的な文学研究の成果を届けるアウトリーチの場として文学館を考える時、両者の接点が見えてくるように思う。

注

1. 国文学研究資料館の多田蔵人氏は同事業を次のように説明している。

国文学研究資料館（以下、国文研）では、令和3年度より「近代文献草稿・原稿類に関する所在目録調査と研究」と題した事業を行っております。全国の文学館、図書館がすでに目録を公開している自筆資料のうち、ご協力を仰ぐことのできる資料につきまして、横断検索できるデジタル目録を作成できないかと考えております。また自筆資料の高精細デジタル画像化と、当館の「近代書誌・近代画像データベース」での公開も、ご協力いただける機関については行っております。

令和3年度は、各地の文学館・図書館に所蔵された自筆資料の所蔵状況確認作業を行いました。さらにかごしま近代文学館所蔵「島尾敏雄特別資料」中の自筆原稿・草稿の一部、代表作『死の棘』や戦争小説の関連草稿52点（1,952コマ）についてデジタル画像撮影を行い、令和4年4月18日に「近代書誌・近代画像データベース」上にて公開を行いました。（「国文学研究資料館「近代文献草稿・原稿類に関する所在目録調査と研究」事業について」）

2. 中原中也の全集は、第一次（『中原中也全集』全3巻 創元社 1951年6月完結）、第二次（『中原中也全集』全1巻 角川書店 1960年3月完結）、第三次（『中原中也全集』全5巻別巻1 角川書店 1971年5月完結）という過程を経て、第四次にあたる新編全集に至る。佐々木幹郎氏はその歴史を次のように振り返っている。

散逸していた第一次資料を集めることだけにエネルギーを込める以外になかった初期には、現存資料の詳細を調査することはできなかった。第一次、第二次全集ができた後、第三次全集にいたって、やっと資料の調査研究の方法が見出された。詩作品については、草稿の推敲過程を示すという、この国ではじめての試みが行なわれたのである。テキストの生成論として、第三次全集「別巻」に掲出された吉田熙生の「草稿細目」は、歴大な時間を費やしての基礎作業だった。第四次全集はその成果を引き継ぎ、改めて基礎作業をやり直し、全面的に改訂をほどこすことができた。（『全集』という生きもの）（梅光学院大学公開講座論集 54『中原中也を読む』2006年7月10日 笠間書院）

3. 作品解題「朝の歌」（『新編中原中也全集』第1巻解題篇 再版 2007（平成19）年10月15日 角川学芸出版）

佐々木幹郎「中原中也「朝の歌」全文自筆原稿」（「中原中也研究」第28号 2023年（令和5）8月31日 中原中也記念館）

4. 中原中也記念館「新資料紹介 富士正晴の中原中也論稿」（「中原中也研究」26 2021年8月）

拙稿「富士正晴・伊東静雄と中原中也—「月の光 その一」「月の光 その二」

から「砂の花」へ」（同上）。

5. 『全集』という生きもの（同上）の以下のような箇所を参照した。

一人の詩人の全集というのは何だろうか。九年間、全集編集室で中原中也の遺稿に毎日のようにつきあっていたときのことをふり返ると、全集とは、バウムクーヘンのように、年月を経るごとに年輪を重ねて膨らんでいく「物語」、としか言いようがないように思う。

日本の近代詩研究は、いまだに第一次資料に対する基礎作業をおろそかにしたままである。作者のオリジナル草稿に戻ることによって見えてくるものは、底が深い。例えば、作者特有の誤字、作者が慣例としている表記法などから、その時代の文学の状況にリンクしていく。そこから、かつての時代と現在を結びつける想像力を羽ばたかせること。いかに厳密な校訂作業がほどこされた全集が出た後でも、オリジナル草稿に戻っての研究は、何度でも繰り返し、人を代えて行なわれるべきだとわたしは思う。

全集は（特に決定版と銘打つ場合は）、作者が書き残したものをすべて網羅するという建前で編集されるものなのだが、それがかなうことは一〇〇パーセントあり得ない。何年かかっても、何度でも、未来の子どもたちがそのときまでに発見された資料によって、より充実した全集に改訂すればいいのである。そのときのために、全集に必要なのは、現時点での最大限の書誌情報であって、それが過去と未来をつなぎとめる。そのようにして、資料をめぐるさまざまな情報は、大きな物語の年輪をかたちづくるのだ。

付記

国文学研究資料館の「近代書誌・近代画像データベース」が文学者の自筆原稿を撮影、公開している目的については、多田蔵人氏の以下の文献をご参照いただきたい。

「「意味」の公開—国文学研究資料館の自筆資料公開事業について」（「日本古書通信」1124号 2023年3月）

「好きなところで、くつろいで研究してください—国文学研究資料館の文学手稿デジタル化事業について」（「昭和文学研究」87集 2023年9月）